

# 俚言の死

—「意味の拡散」—

高橋 顕 志

## 0. はじめに

小論では、四国地方の俚言の中から、動詞語彙をとりあげ、その、死に至る道筋について考える。

いうまでもなく、俚言動詞は、方言動詞語彙体系の中の、一つの構成要素として存在し、語彙体系を構成している各動詞が、お互いの関係から作りあげる意味の分担関係の中に存在していた。それらは、安定した意味の張り合い関係の中で、自立していたといい換えてもよい。

そういう存在の軸が、現在、急速に変化しつつある。そして、結果として、各俚言動詞は、その意味分担の役目を終えることとなる。

そんなとき、俚言動詞は、どのような「最後のあがき」をみせるのか。四国に広く存在していた俚言動詞「ニナウ」・「カク」をとりあげ、その死に至る道筋と、そこから観察される「死の直前の輝き＝意味の拡散」について述べる。

## 1. 資料

『松山市・高知市間における方言の地域差・年齢差 —グロットグラム分布図集—』（以下、『図集』と呼ぶ。注1）所載のデータから、「支持動詞」についての項目群、とくに「ニナウ」と「カク」についてのものを使用する。小論で示す分布図は、それから必要な部分のみを切り出して提示する。調査の概要・分布図作成の手続きなどについては、『図集』にあたっていただきたい。

## 2. 「ニナウ」の死

四国地方には、「支持動詞」の一つとして、「天秤棒」（注2）を使用し、肩で対象物を支え持つ動作を表現する「ニナウ」が存在する（注3）。

『図集』149頁には、

「天秤棒で『ニナウ』」

の標題のもとに、その分布が示してある。すなわち、絵1（注4）を提示したときの、その動作を表現する動詞として、「ニナウ」という言語形式が、愛媛県・高知県を問

絵 1

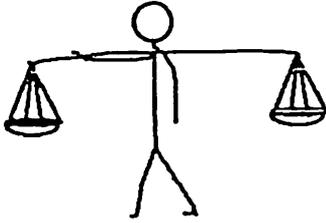
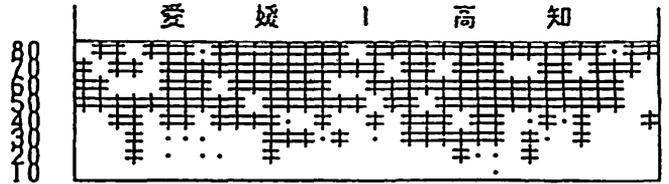


図 1

≠ ニナウ



わず20歳代以上の年齢層にあらわれるのである（図1）。

さて、臨地調査の際には、さきの質問をした直後に、

「では、これを『ニナウ』とはいいませんか」

と、さらに質問をくりかえした。こういう、いわゆる「S式質問」の場合には、回答

欄に 「私自身が使う」

「聞いたことがある」

「聞いたこともない」

という三種の選択肢をあらかじめ準備しておき、これはこれでまた別の、独立した項目として分布図を作成した。

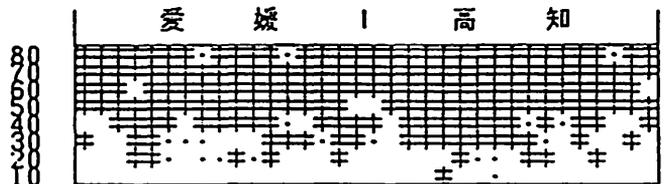
その項目で、

「私自身が使う」

と答えた人のみを符号化したのが図2である。

図 2

≠ ワタシジニシカ ヲツカウ



言語形式をはじめから与える「S式質問」の場合は、一般に「なぞなぞ式質問」の場合よりも広く出現する。ここでは、10歳代の話者の中にも、この場面を「ニナウ」で表現する人がいることを示している。

このように「ニナウ」は、「天秤棒を利用して」という、本来の場面で使用されている場合が多いのであるが、共通語にそういう言語形式がないこと（注5）、また、現在では、「天秤棒」そのものを用いる運搬方法が見られなくなってきていることか

ら（注6）、この「ことば」（注7）は、しだいに不安定になりつつある。

「では、これを『ニナウ』とはいいませんか」

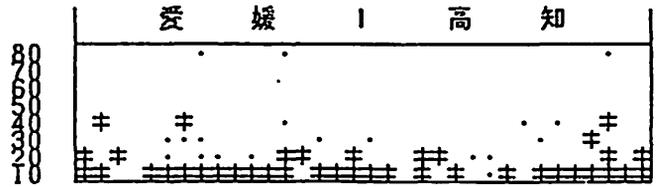
と質問したとき、

「聞いたこともない」

と回答したのが、図3で符号化した人たちである。この分布図は、若い世代を中心として、この言語形式が忘れ去られようとしていることを示している。

図3

キ キイタコト モ ナイ



ところで、「ニナウ」という言語形式は、また、とんでもないところでも回答された。すなわち、絵2について尋ねたとき図4に示す人々から、また絵3について尋ねたとき図5の凡例「ニナウ」に示す人々から、さらに絵4について尋ねたとき図6の凡例「ニナウ」に示す人々から、絵5について尋ねたとき図7に示す人々から回答されたのである。

絵2

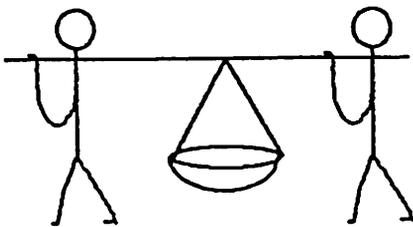
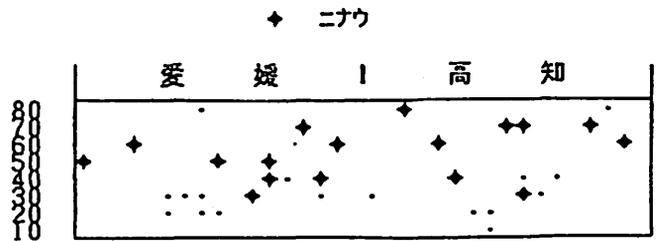


図4



絵3

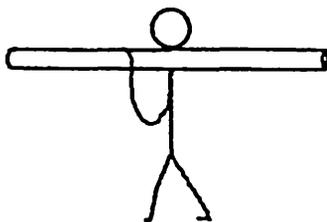
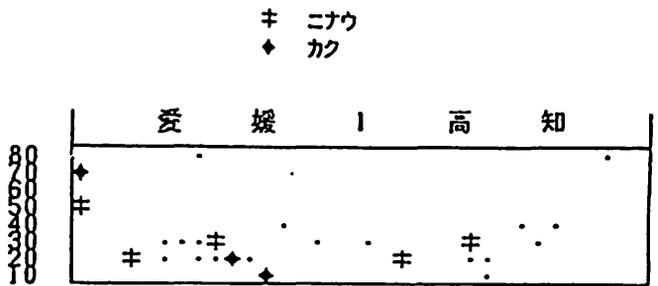


図5



絵4



絵5

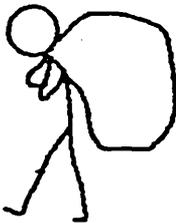


図6

O	クシユ-	%	ニナウ
Q	コシヨウ	\$	サケル
+	カルウ	N	N.R
#	カク		

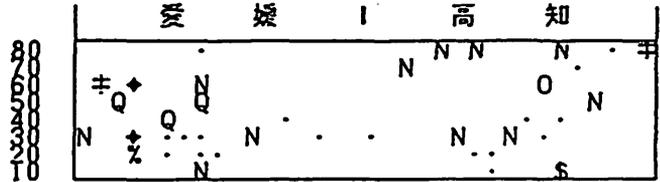
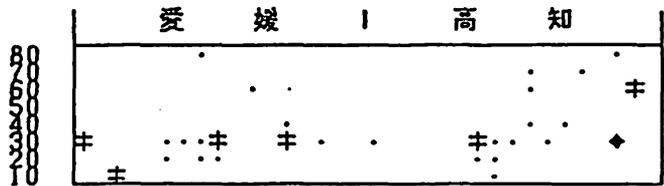


図7

#	ニナウ
+	ニノウ



いずれもわずかではあるが、このように、「天秤棒を使用して」という本来の意味からいえば、あきらかに間違っただけの回答がなされたのである。

さらに、間違いを誘導してみた。すなわち、絵2を質問した直後、絵3を質問した直後、絵4を質問した直後に、それぞれ

「では、これを『ニナウ』とはいいませんか」

と質問したのである。その結果が図8・9・10である。

いずれも、

「聞いたこともない」

の回答が多数を占める。

話者の個人差も多いことから、ここでは、分布を老壮年層・青年層・少年層と三段階に抽象化して見ていく。

「聞いたこともない」

は、50歳代以上の老壮年層に帯状に分布するとともに、10歳代（少年層）にも帯状に分布する。その中間の、20～40歳代を中心とする青年層には空白域が見られ（注8）、その青年層には、

「私自身が使う」

「聞いたことがある」

が分布する。

図 8

♯ ワタシシ`シン カ` ヅカウ

愛 媛 | 高 知

80	♯	♯	.			♯	♯	♯	♯	♯
70	♯	♯				♯	♯	♯	♯	♯
60	♯					♯	♯	♯	♯	♯
50						♯	♯	♯	♯	♯
40						♯	♯	♯	♯	♯
30						♯	♯	♯	♯	♯
20						♯	♯	♯	♯	♯
10						♯	♯	♯	♯	♯

♯ キタコト カ` アル

愛 媛 | 高 知

80	♯	.				♯				.
70	♯					♯	♯			
60	♯					♯	♯			
50	♯					♯	♯			
40	♯					♯	♯			
30	♯					♯	♯			
20	♯					♯	♯			
10	♯					♯	♯			

♯ キタコト モ ナイ

愛 媛 | 高 知

80	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
70	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
60	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
50	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
40	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
30	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
20	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
10	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯

図 9

♯ ワタシシ`シン カ` ヅカウ

愛 媛 | 高 知

80	♯	.	♯			♯				.
70	♯					♯	♯			♯
60	♯					♯	♯			♯
50	♯					♯	♯			♯
40	♯					♯	♯			♯
30	♯					♯	♯			♯
20	♯					♯	♯			♯
10	♯					♯	♯			♯

♯ キタコト カ` アル

愛 媛 | 高 知

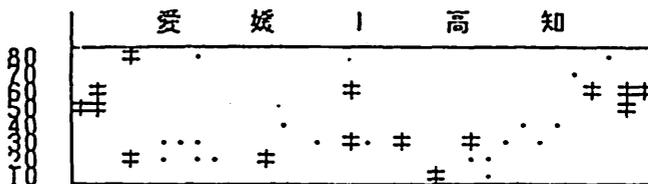
80	♯	.				♯				.
70	♯					♯	♯			♯
60	♯					♯	♯			♯
50	♯					♯	♯			♯
40	♯					♯	♯			♯
30	♯					♯	♯			♯
20	♯					♯	♯			♯
10	♯					♯	♯			♯

♯ キタコト モ ナイ

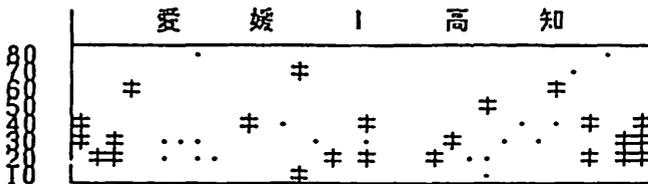
愛 媛 | 高 知

80	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
70	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
60	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
50	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
40	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
30	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
20	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯
10	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯	♯

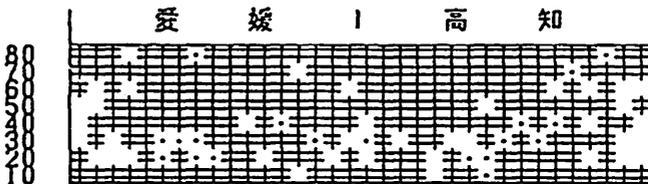
図10 ㊦ ワタシシ`シン カ` ツカウ



㊦ キイタコト カ` アル



㊦ キイタコト モ ナイ



老壮年層に帯状に分布する

「聞いたこともない」

は、「ニナウ」本来の正確な意味、つまり「天秤棒を利用して」という意味特徴が生きていることの反映であり、この人々は、「天秤棒を利用して」いない絵2・3・4では、「ニナウ」が使用できないのである。

ここでは選択肢の関係から、

「聞いたこともない」

にまとめてしまっているが、実際の調査段階では、この世代の話者から、少なからず、

「そんな言い方は絶対にしない」

「そんなふうには言えない」

という回答が出た。これらの回答には、このことばと、それをとりまく「支持動詞体系」の規範を守ろうとする明確な意志さえ感じられる。

それに対し、少年層に分布する

「聞いたこともない」

は、また別の意味を持つ。すなわち、この世代は、「ニナウ」という言語形式そのものを知らないのである。このことは、さきの図3での事実とも符合する。

このグロットグラム分布図の、80年のスパンには、このように、「ニナウ」が、明確な、本来の意味を持った、規範力のある段階から、その言語形式の存在そのものが否定される、そんな段階までが含まれているのである。

ところで、図8・9・10で、

「私自身が使う」

「聞いたことある」

と答えた人々（ここでは抽象化して、年代層として捉え、青年層と考えた）は、肩で支持していればどんな場合にでも、まったくおかまいなしに「ニナウ」を「使う」。また、そういういいかたを「聞いたことがある」のである。

言語形式「ニナウ」の、死に至る道筋は、このように、三段階にわけて見ることができる。

### 3. 「カク」の死

四国地方には、「支持動詞」の一つとして、「動作主が二人以上」という意味特徴を持つ「カク」が存在する（注9）。

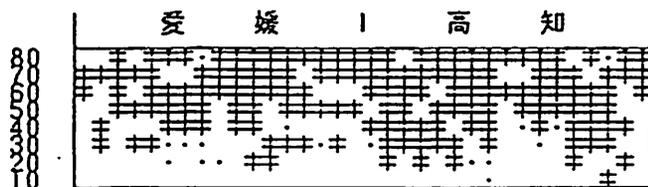
『図集』152頁には、

「もっこを二人で『カツグ』」

の標題のもとにその分布が示してある。すなわち、絵2（前掲）を提示したときの、その動作を表現する動詞として、「カク」が、愛媛県・高知県を問わずあらわれるのである（図11）。

図11

キ カク



ここでも、臨地調査の際に、さきの質問をした直後に、

「では、これを『カク』とはいいませんか」

と、さらに質問をくりかえした。

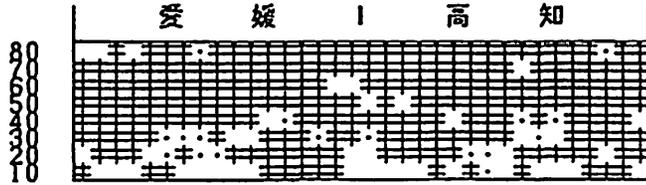
その分布図の中で、

「私自身が使う」

と答えた人のみを符号化したのが図12である。

図12

キ ワタシシ`シン カ` ツカウ



ここでも「カク」は広く出現し、若い世代の話者の中にも、この場面を「カク」で表現する人が多いことを示している。

このように「カク」は、「動作主が二人以上」という、本来の場面で使用されている場合が多いのであるが、共通語にこの言語形式、また「動作主が二人以上」という意味の切り取り方がない（注10）ことから、このことばは、次第に不安定になりつつある。

「では、これを『カク』とはいいませんか」

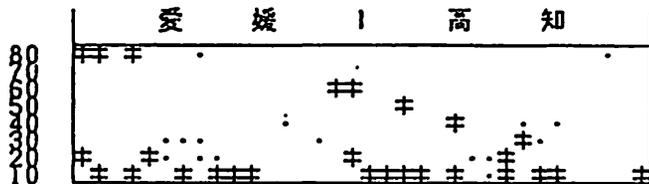
と質問したとき、

「聞いたこともない」

と回答したのが、図13で符号化した人たちである。この分布図は、若い世代を中心として、このことばが忘れ去られようとしていることを示している。

図13

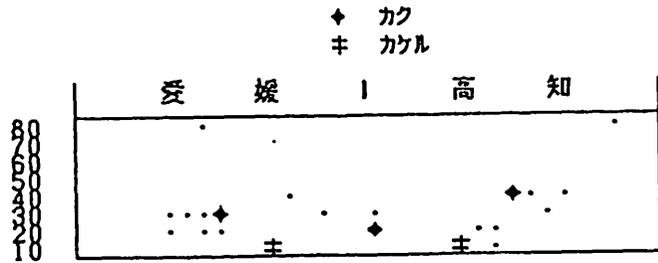
キ キタコト モ ナイ



ところで、「カク」という言語形式は、また、とんでもないところでも回答された。すなわち、絵1について尋ねたとき、図14の凡例「カク」に示す人々から、また絵3について尋ねたとき、図5の凡例「カク」に示す人々から、さらに絵4について尋ねたとき、図6の凡例「カク」に示す人々から回答されたのである。いずれもわずかではあるが、このように、「動作主が二人以上」という意味特徴を持つという点からいえば、あきらかに間違った回答がなされたのである。

さらに、間違いを誘導してみた。すなわち、絵1を質問した直後、絵3を質問した直後、絵4を質問した直後に、それぞれ

図14

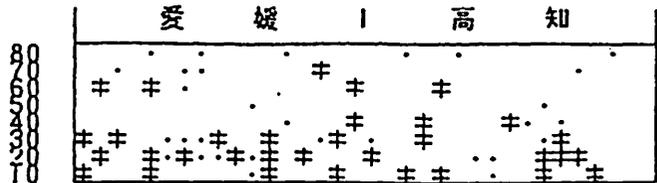


「では、これを『カク』とはいいませんか」  
と質問したのである。その結果が図15・16・17である。いずれも、

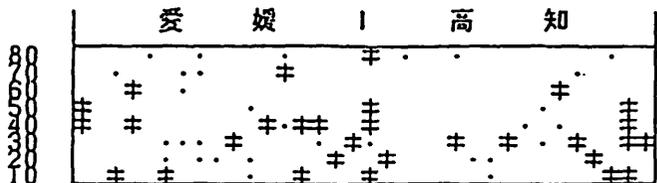
「聞いたこともない」  
の回答が多数を占める。それは、50歳代以上の老壮年層に帯状に分布するとともに、10歳代（少年層）にも帯状に分布し、その中間の20～40歳代を中心とする青年層には空白域が見られるのである。そして、その青年層には、

「私自身が使う」  
「聞いたことがある」  
が分布する。 ◆ ワタシシ`ン カ` ヅカウ

図15



◆ キイタコト カ` アル



◆ キイタコト モ ナイ

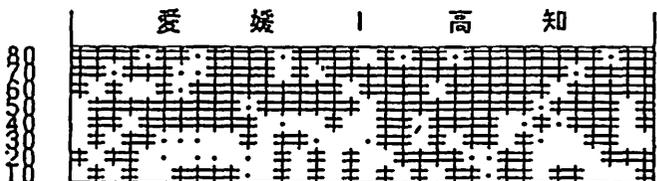
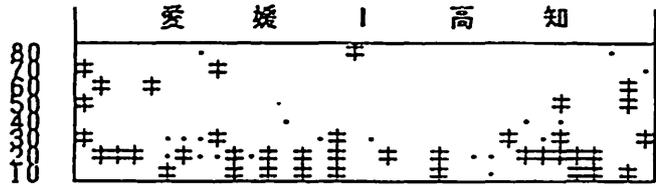
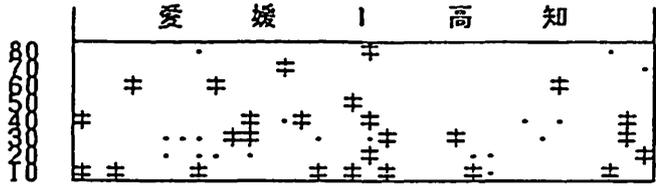


図16 ♯ ワタシ`シン カ` ヅカウ



♯ キタコト カ` アル



♯ キタコト モ ナイ

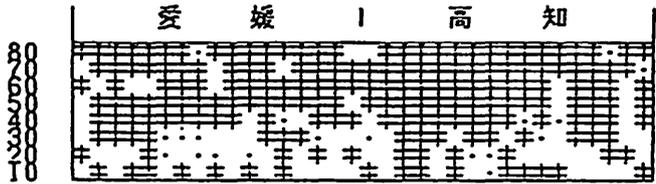
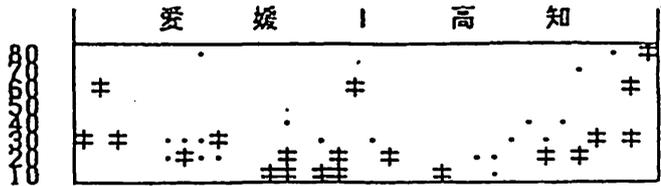
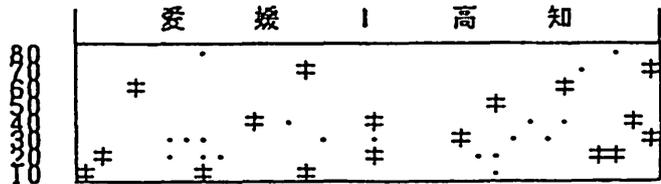


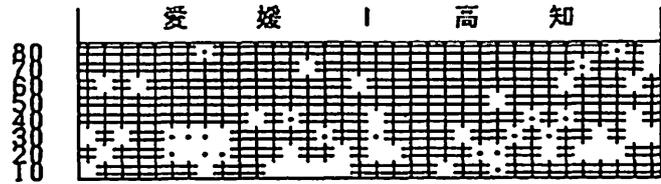
図17 ♯ ワタシ`シン カ` ヅカウ



♯ キタコト カ` アル



♯ キタコト モ ナイ



老壮年層に帯状に分布する

「聞いたこともない」

は、「カク」本来の正確な意味、つまり「動作主が二人以上」という意味特徴が生きていることの反映であり、この人々は、「動作主が一人」である絵1・3・4では、「カク」が使用できないのである。

それに対し、少年層に分布する

「聞いたこともない」

は、また別の意味を持つ。すなわち、この世代は、「カク」という言語形式そのものを知らないのである。このことは、さきの図13での事実とも符合する。

このグロットグラム分布図の、80年のスパンには、このように、「カク」が、明確な本来の意味を持った段階から、その言語形式の存在そのものが否定される、そんな段階までが含まれているのである。

ところで、図15・16・17で、

「私自身が使う」

「聞いたことがある」

と答えた人々（ここでは抽象化して、年代層として捉え、青年層と考えた）は、どんな場合にでも、つまり、「動作主が一人」であろうが、「二人」であろうが、まったくおかまいなしに「カク」を「使う」。また、そういういいかたを「聞いたことがある」のである。

ここでも、言語形式「カク」の、死に至る道筋を、三段階のプロセスにわけて見ることが出来る。

#### 4. 「意味の拡散」

2.3.で「ニナウ」・「カク」の、死に至る道筋を観察した。

このグロットグラム分布図の、80年のスパンには、「ニナウ」・「カク」が、明確な本来の意味を持った、規範力のある段階から、その言語形式の存在そのものが否定される、そんな段階までが含まれていた。

さて、俚言「ニナウ」・「カク」は、このようにして死に至るのであるが、その道筋の中で、図8・9・10・15・16・17での、

「私自身が使う」

「聞いたことがある」

という回答が注目される。

これらの回答は、さきに述べたように、「間違いを誘導した」のであるから、あまり意味を持たないのかもしれない。また、あるいは、同じような質問を何度も繰り返された話者が飽きてきて、いかげんに回答したものも混じり込んでいるかもしれない。しかし、そのように、一歩ひいてみても、「間違いを誘導した」のではない図4・5・6・7・14に、この種の「間違った回答」が出現したのも事実である。

これらの回答には、やはり言語変化における一つの事実があらわれていると考える。

「ニナウ」・「カク」は、その「死の直前」に、人間が何かを支え持っている場面なら、どんな場面でも使用されるようになってしまっている。調査結果を素直に見ていけば、現象として（パロールとして）、「死の直前」にこれらの言語形式は、急激に意味・用法を広げるといふ事実があきらかとなる。

語の意味を、意義特徴の束と考えることができるとするならば（注11）、「ニナウ」には、その意味を構成している意義特徴の束の一つに「天秤棒を使用して」が存在していた。また、「カク」の意味を構成している意義特徴の束の一つには「動作主が二人以上」が存在していた。そして「死の直前」にその束の一つが失われてしまっているのである。

語彙体系の中で、他の語との緊密な関係の中で、語を繋ぎ止めていた重要な糸が切れてしまい、「ニナウ」・「カク」が「支持動詞体系」の中を浮遊しはじめたといふ換えることもできよう。

語彙体系の中で、がんじがらめに縛られ、自由な使用がままならなかった。そのうっぶんを、まるではらそうとでもするように、それらの束縛から自由に解放され、用法が急激に広がるのである。

重い星が、その進化の最終段階で重力崩壊を起こし、ブラック・ホールが生まれるという。そして、そこはすべてのものを呑み込んでしまうという。言語変化の最終段階で、「ニナウ」・「カク」がみせる姿は、そんなものをも連想させる。

「ニナウ」・「カク」のこういう現象は、「意味の拡散」ともいいうるだろう。こういう中間的な段階を通して、語は死んでいくのである。

## 5. 混乱の世代

「ニナウ」・「カク」が「意味の拡散」現象をおこすのは、中間の世代、つまり図8・9・10・15・16・17で、

「私自身が使う」

「聞いたことがある」

と答えた人々（抽象化して、年代層として捉え、青年層と考えた）においてであった。

老壮年層の話者は、明確な安定した「支持動詞体系」を規範として持っている。ここでは、それぞれの言語形式が、その体系の中で、それぞれ明確に位置付けられ、一つ一つの言語形式が、意味領域を明確に分担しながら存在している。

そういう安定した語彙体系が、時代の変化とともに動き始める。「ニナウ」の場合は、共通語にそういう言語形式がないことと、さらに、「天秤棒」そのものを用いた運搬方法がなくなっていったこと、「カク」の場合は、やはり、共通語にそういう言語形式、また「動作主が二人以上」という意味の切り取り方がないことから、この二つの言語形式は四国から消え去っていきこうとしている。

そして、少年層の話者は、次の時代の、新たな、安定した「支持動詞体系」を身につけようとしている。ここには、「ニナウ」も「カク」もない。おそらく彼らは、共通語と同じ「支持動詞体系」を身につけるのであろう。

こういう二つの安定した語彙体系のぶつかりあう、そういう時点で中間の世代（青年層）は生きてきたのである。

筆者は、この地域の出身で、また、この世代に属する人間である。筆者自身の内省をしばらく述べてみようと思う。

「カク」については、「動作主が二人以上」でないと使用できない。このことから、筆者は、これに関して、古い世代に属していることがわかる。

しかし「ニナウ」については、言語形式を知ってはいるが、意味が明確ではない。自分で使うことはまずない。したがって、筆者自身が話者になれば、絵1を含め、絵2・3・4でも「聞いたことがある」を回答するであろうと思う。

考えてみれば、この「ニナウ」の類の俚言が筆者には多い。言語形式を知ってはいるが意味は明確ではないという類である。そして、当然のことながら、こういう語彙の使用に際しては、非常に緊張する。また、その使用に関して自信がない。

中間の世代は、まさに、このような大きな体系的変化を、身をもって体験する世代である。この時期、日本という国は大きな変化を遂げた。その大きな変化の中で、言語形成期をすごした世代は、このように、「混乱の世代」であるともいえる（注12）。

筆者は、以前、この「松山・高知グロットグラム調査」のデータから、「廃物廃語と無回答（NR）」を書いた（注13）。ここでは、物が消滅するに際して、言語形式が、また、そのもととなる概念・意味の世界がどのように変化していくかについて見たのであった。実は、あそこでも筆者には、このような世代に属する者としての思い入れがあった。すなわち、「台唐臼」・「唐竿」などについて、筆者自身は「未習得のNR」

であったのである。

そういう意味で、「廃物廃語と無回答（NR）」は、筆者の世代のアイデンティティのためにあった論文であったが、小論もまたそのように位置付けられる（注14）。

## 6. おわりに

この学問を選んだとき、「俚言の死」は、避けて通ることのできない現象であると考えた。そして、こういう時代に生きている我々の世代の仕事として、俚言の「死にざま」を見届ける義務があると考え、この仕事を始めた。

小論では、わずかな結論ではあるが、一つの「死にざま」を確認することができたと思う。

小論で述べたことは、大きな歴史の流れの中での、小さな一コマにすぎないかもしれない。言語変化は今までも、そしてこれからも、人間の社会の変化とともに起こってきたし、また起こるものだからである。

現在は、我々の世代が経験したよりもさらに大きな社会的変化が進行しつつある。若い世代は、安定した、次の時代の語彙体系へ移行するといったが、そんなものはもはや考えられない時代なのかもしれない。ますます、ことばの変化のスピードが早くなってしまふのであろう。

しかし、そうであれば、そうであるほど、「ことば」は、次から次に生産され、次から次に死滅していくのである。今後、また、さまざまな「ことばの死にざま」を確認することができるのである。

／注／

（注1）1986.9.30発行。私家版。

（注2）天秤棒だけではなく、高知県で「サス」と呼ぶ、天秤棒とよく似た道具（両端の尖ったもので、藁束・小枝の束を両端に突き刺して運ぶ）を使用するときにも「ニナウ」を使用する。

（注3）拙稿（1977）、拙稿（1984）など。

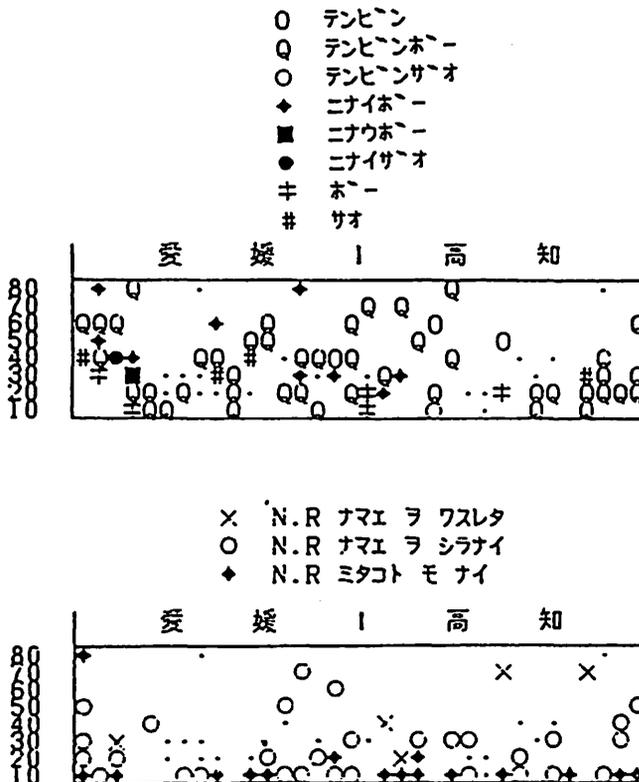
（注4）調査の際には、『日本言語地図』のための調査において、国立国語研究所が作成した絵を、そのまま使用させていただいた。小論では、それを略図化したものをあげてある。小論での絵1～6は、『日本言語地図解説—方法—』の付録2（129頁）に掲載されている絵と、次のように対応する。

絵1→265 ・ 絵2→266 ・ 絵3→264 ・ 絵4→263 ・ 絵5→262

(注5) 「責任をニナウ」。「おおきな負担をニナワなければならない」などという比喩的な用法は共通語にも見られるが、ここでは、具体的な動作としての「支持動詞」を考えていることから、その分野での「ニナウ」についてのみ考える。のちに述べる筆者自身の内省のうち、筆者がこの言語形式を、意味が明確でないまま知っているのは、このような比喩的用法が存在したことにもよるのであろう。注14参照。

(注6) 「天秤棒」そのものについても調査項目に入れておいた。図18は、その分布図の一部である。若い世代を中心として、共通語形、またその変化した形、さらに「NR」が分布する。これは、「天秤棒」という「物」そのものが忘れ去られようとしていることを示している。

図18



(注7) 小論では、「指示されるもの」を「意味」と呼び、「指示するもの」を「言語形式」と呼んでいる。そして、その二つが恣意的に結び付いたものを「ことば」と呼ぶ。

(注8) 「天秤棒」そのものが、より早く存在しなくなった両端の松山市・高知市に、空白域がやや広く見られる。さきの図18(注6)での事実とも符合する。

(注9) 拙稿(1977)、拙稿(1984)など。

(注10) 辞書類、たとえば『岩波 国語辞典 第三版』には、「カク」の意味として、「(二人以上で一つの物を) かつぐ」が掲載されている。しかし、日常の言語生活では、「籠をカク」「籠カキ(名詞)」という、非常に限定された文脈でしか用いられていないようである。共通語では、このように「カク」が、非生産的な姿になってしまっている。これらは、古いことばが、化石的に「イデオム」として残っているものと位置付けることができる。ここにもひとつの「死にざま」がある。

(注11) 国広哲弥(1967)。8頁。

(注12) のちに述べるように、言語変化はいつの時代にもあったし、またこれからも起こる。しかし、1945年から現在までの時期は、未曾有の言語変化が日本という国の中で起こった、この時代に言語形成期をすごした人々を「青年層」・「中間の世代」・「混乱の世代」と呼んだ。

(注13) 『国語学』第143集 1985.12

(注14) 「ニナウ」の場合は、「中間の世代」たる筆者に、古き俚言の、その「言語形式」のみが記憶として残っているのである。つまり、「ニナウ」ということばの、「言語形式」は明確に記憶に残っているにもかかわらず、「意味」はあやふやなのである。

それに対して、「NR」に関するものは、古き俚言の「意味・概念」が「ああ、あの時のあの道具だ」という形で、明確に記憶に残っているにもかかわらず、それを指示する「言語形式」は残らなかったのである。

これらは、ことばを成り立たせている「指示するもの(言語形式)」と「指示されるもの(意味)」のうち、どちらかが記憶に残り、もう一つが記憶に残らなかったものであると統一的に考えることができるから、言語史の理論の中で、同じ範疇に入れて考えることができよう。

／参考文献／

- 国立国語研究所（1966～1974）『日本言語地図1～6』大蔵省印刷局
- 国広哲弥（1967）『構造的意味論—日英両語対照研究—』三省堂
- 国広哲弥（1970）『意味の諸相』三省堂
- 柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進（1976）『ことばの意味—辞書に書いてないこと—』平凡社
- 高橋顕志（1977）「四国諸方言における支持動詞カクについて—語彙による比較方言学の試み—」『都大論究』第14号
- 徳川宗賢（1976）「単語の死と生—方言接触の場合—」『国語学』第115集
- 柴田武（1979）「パロールの言語学」『月刊言語』Vol.8 No. 5 大修館書店
- 国語学会編（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
- 高橋顕志（1984）「方言語彙の比較について—語彙による比較方言学の確立をめざして—」『現代方言学の課題』第2巻 明治書院
- 国立国語研究所（1985）『方言の諸相』三省堂

（1990.8.23 稿）

（たかはし けんじ・高知女子大学助教授）